

唱していると解釈することができよう。おそらくではあるが、圭室の主張は、キリスト教（プロテスタント）による告別式のような葬祭をしなければ、伝統仏教教団の「活きる路」はなくなるということであった。彼のこうした見解が一〇〇%正しいかどうかは断言できないが、戦後における「檀家離れ」という現象をはじめ、「直葬」、「生前葬」、「散骨」などといった新しい葬式の形態の台頭を勘案すれば、その主張には一理あったと認めざるをえない。

いずれにしても、圭室が用いた「葬式仏教」論は、現在しばしばみられるような、「葬式はいらない」といった極論ではなかった。このような意味において、今日、否定的な表現としてありがちな「葬式仏教」批判と圭室の「葬式仏教」論の間には、そのニュアンスにいささかの相違があるといってもよいのではなからうか。

戦後日本仏教と民俗学——五来重の場合——

碧海 寿広

仏教民俗学の創始者として知られる五来重（一九〇八—一九九三）については、二〇〇〇年代以降にいくつかの研究が出されてきた。「民俗資料を使った仏教史」としてその学問の方法論的な側面について考察した林淳、近代の哲学的な仏教観を批判する実践の仏教思想家として五来を評価した碧海寿広、五来言論は「近代仏教」が切り捨てた「民俗」「俗信」を学問的に救出したが、他方で同時代の「新宗教」「迷信」は蔑視・排撃したと指摘する土居浩、などの成果である。本発表ではこれ

らの先行研究をふまえつつ、戦前から戦後にかけての五来学問形成と展開、その背景や特質について考察する。

東大で仏教学を学び、紀平正美の哲学講義に魅了されて「龍樹の『中論』の八不中道を、ヘーゲル弁証法によつて解釈するというテーマ」を卒業論文に選んだ五来は、しかし大学卒業後、民衆信仰が濃密に息づく高野山の実情を目のあたりにしたことで、仏教学が扱う仏教とは「まったく異質の仏教があることを知り、そうした「生きた日本仏教」への関心を深めていく。その後、京大の大学院に在学中、柳田国男の講演を聴いて衝撃を受けた彼は、さらにその後に柳田の「毛坊主考」などを讀んだことで「自分の学問の方向が決ま」り、「それまでならった教団中心の仏教の歴史のもつむなしさというもの」から「一ぺんに解放」された。それから全国の民俗調査を独自に行うようになった彼は、戦時下の昭和一六年に初めての公開論文「弘法大師伝説の精神史的意義（上）」を発表する。これは、全国の大師伝承から「日本（民族）精神」を抽出するという趣旨の論文で、時局的なテーマ設定が色濃いが、しかし他方で、文字言語に対するオーラルな資料の優位を、また民衆文化の意義を強調しており、戦後の彼の学説を予感させるものであった。

戦後しばらく後の一九五二年、五来は「仏教と民俗学」という論考を発表し、「仏教民俗学」という新たな学問を宣言する。そこで五来は、「一般仏教徒の信仰の深化または拡大」に役立ってこなかった近代仏教学を批判しつつ、「現在各仏教大学の宗門教育に共通する一つの弱点」として、若い僧侶が大学卒業後に「自分の寺へ帰ってから、檀信徒のあいだにおこな

われる行事や信仰を理解することができないばかりか、これに関する簡単な質問にもこたえられない」ことをあげている。そして、民俗学との協業をすればこうした難点は突破できるのであり、また僧侶が民俗学を応用し「教化対象たる常民の心意をしっかりとぎって布教伝道に活用するならば、護教的精神もまたみだされる」と論じている。こうした仏教(史)学に民俗学を応用することの意義は、例えば浄土宗僧侶の竹田聰洲もまた説いているが、その背景には、当時の民俗学の実践性/社会参加志向の強さというのがあるだろう。「国家神道」なき後の「日本国民の教師」たらんとした柳田の「新国学」にせよ、村落社会に関する知見を活用した民法改正への関与にせよ、民俗学者の社会科教育への接近にせよ、その裏には、国民の日常的な信仰や文化を反省的に理解するために有用な民俗学という新興の学問が、学界も含めた様々な社会領域に進出していくとする意欲が見て取れる。仏教民俗学もまた、そうした潮流の中で誕生した学的実践であった。

この様な発生の由来をもつ五来(ごらい)の学問は、民衆仏教の歴史復元に邁進し、教理の展開よりも庶民救済の諸相をこそ追及した知見を膨大に積み重ねていった。そこで表象された仏教史は、民衆仏教による一元論的な救済史観とでも評すべきイメージに満ちており、それは例えば、親鸞のような鎌倉仏教者の民衆性を強調する論者(服部之総など)とも、近世民衆の中に生きた信仰を見る諸研究とも異なっており、古代から現代までの全歴史を貫く民衆の主體的な仏教創造とその後の教理の付着や制度化による墮落——を語るものであった。

パネルの主旨とまとめ

オリオン・クラウタウ

クラウタウ報告でも触れられたように、本パネルセッションは、敗戦という体験の後に「日本仏教」の語り直しを試みた研究者たちに焦点を当てることで、「日本仏教」概念の再構築と戦後日本における思想空間の更なる理解を目指す論文集『戦後歴史学と日本仏教』(仮題)の出版企画の一環として行われたものである。編者のクラウタウによる全体的なイントロダクションに続き、各発表者は、歴史学・社会学の分野で活躍した服部之総、「葬式仏教」というタームの創造で知られる圭室諦成、伝統的な「仏教学」の限界を感じ、「仏教民俗学」の確立に尽力した五来重を取り上げた。これらの報告に対し、東北大学教授の佐藤弘夫から次のようなコメントが提示された。

戦後日本アカデミズムは、日本社会における「封建的」な性格を徹底的に批判することで自己形成を図ったのであり、日本仏教研究者は、近代の可能性を「仏教」と「民衆」との親近性の内に見出した。しかしこうした彼らの「民衆」なるものは、しばしば「思想」か「実態」という二極分解の様相を呈しており、それは黒田俊雄(一九二六—一九九三)が登場するまで続く。本パネルで取り上げられた三者もまた、それぞれの形でこうした傾向をよく表現していると佐藤はまとめた。最後に佐藤は、本パネルの成果は、どのようにして近代仏教研究以外の領域に広げていけるか、という問いを提示したのである。

これに対して代表者のクラウタウは、本パネルならびに企画中の論文集は、敗戦後に再編成された「普遍性」の概念を理解